

蒼井村正

表紙イラスト／或十せねか

二次元ポチ文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

カースイーター  
呪詛喰らい師外伝

餓 神 乳 辱

後編

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『呪詛喰らい師外伝 餓神乳辱 中編』  
『呪詛喰らい師外伝 餓神乳辱 後編』  
に基づいて作成しております。

※本作はあとみっく文庫『呪詛喰らい師 1～3』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



カースイーター  
呪詛喰らい師外伝

餓 神 乳 辱

後編

蒼井村正

表紙イラスト／或十せねか

## 登場人物紹介

---

### Characters

ときわぎ さき

#### 常磐城咲妃

「呪詛喰らい師」という異名を持つ少女。幼いころから退魔師としての修業を積んでおり、淫神を自身の身体に封じる使命を帯びている。封じた淫神の力は使うことが可能。

いわくらしんじ

#### 岩倉信司

都市伝説研究部の部長。様々な怪異を追っているうちに、淫神の事件に巻き込まれる。

(胸が……張り詰めすぎて爆発しそうだッ！)

放出を止められているのに、精気が変換された乳汁が乳腺内で大量に分泌されているため、爆乳全体が限界を超えて張り詰め、鎖骨のあたりや脇腹の皮膚が、異様な内圧に引きつっているのを感じる。

「よおし、それじゃあ最初は、オレのカノジョに、母乳を口移しで飲ませてもらおうか」

「あ、ああ、飲ませる！ 飲ませるから……早く、出させて……」

ぷしっ！ ぷちゅっ……ぷびゅるっ！

震える声で要求を呑んだ退魔少女の乳先から、内圧の高まりで押し出された少量の乳汁が、狂おしげな脈動とともに射出される。

「ああ、アタシを一番にしてくれるなんて、アンタに惚れ直しちゃう♪」

甘えた声を上げたピアス少女は、巨漢に抱きつき、汗ばんだひげ面に頬ずりした。

「可愛いおめえを飢え死にさせるわけいかねえからよ。そら、啜えろ！」

肉の弛んだ顔を笑み崩れさせて惚気た巨漢は、破裂寸前に張り詰めた右乳房をすくい上げて咲妃の口元に突きつけ、乳首を縛めていた指を離した。

「はむ……んっ……ちゅっ、ちゅっ……ずちゅううっ！ んきゅふううんッ！」

自らの勃起乳頭を啜え込んで吸い上げ、歓喜の呻きを漏らす咲妃の口に、温かく甘い乳汁が口腔内にジュワツ、ジュワツ、と勢い良く迸る。

（私の母乳……凄いい勢いで出てる……美味しい……）

無意識のうちに喉がゴクリと動いて、甘く芳醇な体液を呑み込んでしまう。

「おい！ 自分で飲むんじゃねえ、口に溜めるんだよ！」

（くう……依り代でなければ、その顔面に一発、蹴りでも入れてやりたい所だ……）

声を荒らげる巨漢を上目遣いでにらみながら、神伽の巫女は小刻みに乳首を吸い上げ、口いっぱい母乳を溜め込んでゆく。

「んふ……ンッ……くふ……ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……んむふう……」

温かく甘い乳汁を満タンに溜め込んで、ポッコリと丸く張り詰めた頬を、含みきれず溢れた純白の体液が伝い流れた。

「ねえ、エロエロミルク溜まった？ んふっ、じゃあ、ちようだい」

「ちゅぶ……ンッ……」

啜っていた乳首から唇を離し、目だけで頷いた呪詛喰らい師の唇に、ピアス少女がむしやぶりついてくる。

「いただきます！ んふ……じゆる……じゆるるっ……ん……くふう……ずちゆるるるっ……んふ、んっ！ くちゅ、くちゅ、くちゆるっ……」

「あふ……くちゅ……じゆるっ……んふ……くちゅくちゅくちゅ……ちゅば……」

口腔内に溜まっていた母乳を口移しで受け取り、食欲に飲み干した少女の舌が、更なる

7

滋味を求めて奥まで入り込んでくると、喜悅に目を細めた咲妃は積極的に応じた。

「あはあ、お姉さんの舌、柔らかい。女の子とキスするの……大好きィ……あふ、くちゅ、んふ……ちゅぱちゅぱちゅぱ……れるっ、んはあ、美味しい……」

貫通型のピアスを施された舌と、しなやかにくねる呪詛喰らい師の舌が淫らな軟体動物のように絡み合い、唾液を泡立たせながら絡み合い、戯れて、女同士の淫蕩なディープリキスを繰り広げる。

舌を貫いたダンベルパール型ピアスを咲妃の舌先がコロコロと舐め転がし、そのお返しとばかりに、ピアス少女が咲妃の舌を口腔内に吸い込んでしゃぶり回す。

「んふう！ んくふううう……ぴちゅぴちゅぴちゅ……くは……あふ……」

「あはあ、もつとキス、しよ。はふ……くちゅ……くちゅくちゅくちゅ……じゅるっ……ずちゅるるっ……ちゅっ、ちゅぱちゅぱちゅぱ……くちゅるっ……」

唇の裏側や舌の根元を舐め回され、歯列をピアスにコリコリと搔き弾かれる硬軟取り混ぜた刺激に、神伽の巫女の目が潤む。

「あはあ、レズキス、超気持ちいい。ねえ、ミルクのお代わりちょうだい」

唾液の糸を引きながら唇を離れたピアス少女は、淫らに舌なめずりしながら、追加の母乳を要求する。

「……あ、ああ……あむ……んふ……んっんっんっ……んむう……く……ちゅぷ」

食欲な要求に応じた咲妃は再び自らの乳首を咥え込み、口いっぱい母乳を呑むと、自らキスを仕掛けた。

「んんうむううう！ んふ……んくんくんく……コクンツ……んはあ、美味しい……唾も飲ませて。くちゆくちゆくちゆるっ！」

口移しの授乳と、唾液を吸い尽くすかのような濃厚なレズキスが二度、三度と繰り返される。

「んふ……ちゅぱっ……んはあああ……お腹いっぱいになったア……」

甘い母乳の香りがする吐息を漏らしたピアス少女の口から、オレンジ色の煙のようなものが吐き出され、意識を失った肉体が床に倒れ込む。

「やっ……満たされたか……。しっ……神体……召迎……」

依り代から離れた神体を慌てて自らの口へと迎え入れる咲妃。

神伽の巫女の食道を下り落ちたクナド神は、常磐城の名を冠する少女の胃の腑に落ち着いた。

「ハアハアハアハア……まずは、一人……」

「ブラボー！ これでオレのカノジョは助かったな。時間が勿体ないから、次は二人まとめて面倒見てくれよ」

依り代の巨漢が新たな指示を下す。



男の太い指は、相変わらず、左右の乳首をきつく摘んで母乳の噴出を封じていた。

「こっ、今度はどうすればいい？」

爆乳から込み上げて来る狂おしい射乳欲求に震えながら、呪詛喰らい師は問いかける。

「ワカメ酒、知ってるだろ？ あれ、やってみせてくれよ」

「ワカメ酒だと!？」

想像の斜め上を行く欲求を突きつけられ、眉をひそめる咲妃。

「エロエロにご奉仕してくれる約束だぜ。咲妃ちゃんのツルツルオマ○コじゃ、正式な意味での『ワカメ酒』とは呼べねえかも知れないけどなあ。ヒヤハツハツ！」

デブ男は、ツルリと滑らかな呪詛喰らい師の秘部を舐めるように見つめながら、下品な笑い声を上げる。

「う……く……わかった。やればいいんだろう」

オヤジ趣味丸出しの要求を渋々受け入れた神伽の巫女は、調理台の上に正座し、上体を心持ち反らした姿勢を取った。

ピッチリと閉じ合わされた太腿と、無毛の恥丘が形作った三角形の窪みを器として、酒の代わりに母乳を溜め込み、飲ませようという趣向だ。

「後ろから搾るから、手ブラで受け止めろよ」

「わかった……。あ、あまり、強く絞るんじゃないぞ。凄く敏感になってるんだ」

言われたとおり、乳先を掌で覆い隠しながら、巨漢に念を押し咲妃。

爆乳にあてがった掌に、早鐘の様に鼓動する心拍が伝わってきた。

（胸の鼓動が激しい……新たな快感を期待してしまっているのか？）

神伽の巫女は、欲情し、込み上げる放出欲求に屈してしまいそうな肉体と、まだ冷静さを残している思考のせめぎ合いに困惑する。

「無茶はしねえよ。しかし、その恰好、すげえ色っぽいなあ、マジでチンポにピンピンくるぜ！」

両手で乳先を隠し、恥ずかしげに俯いた呪詛喰らい師の艶姿を、太った男は好色な笑みを浮かべて見つめる。

「じつ、時間がないんだろう？ はっ、早く……搾ってくれ……」

羞恥の感情に顔を火照らせてしまいながら、神伽の巫女は搾乳を急かす。

「そう焦るなって。たっぷりモミモミして、いっぱい搾り出してやるからよ！」

ポツテリと肉厚な手で豊乳を背後から驚掴みにした巨漢は、片手では握り込めぬ肉の果実を、いやらしい指使いでこね回す。

ぎちっ、ぎゅむっ、ぎゅむっ……むにゅっ、むにゅむにゅむにゅっ……ふにっ、ふにっ、きゅむっ……ぎちゅっ！

柔らかさと弾力を併せ持った極上の肉果を軋ませて、男の指が深々と沈み込み、浮き上

がり、複雑な円を描いて揉みこね、重々しく張り詰めた爆乳全体をブルブルと振動させて搾り飛ばした。

「くぁ！ んんんっ！ あ……あんっ！ やっ、ひゃあう……んんっ！」

性感の塊と化した乳房を緩急交えた指使いで弄ばれる快感に、深紅の革帯に彩られた色白な裸身がよがり悶える。

「いい揉み心地だなあ。柔らかくて、弾力もあつて……しかもデカパイだ！」

手に余るサイズの乳肉を肩越しに鑑賞しながら、太った男は感嘆の声を漏らす。

「ひぁ！ あぁああんっ！ あぁあぁ、もつと……もつと強く搾って！ くはあうんッ！ あふうううう……いつ、ヒッ……きゅふうううくんんっ！」

苦しげに眉を寄せて呻きながらも、射乳欲求に突き動かされた少女は、色っぽい声で更にハードな搾乳をおねだりしてしまう。

「その顔も声もエロエロだなあ。お望み通り思いっきり出させてやるよ。これで……イッちまいな！」

「ぎちいいいいッ！ ぎちゅぎちゅぎちゅうううッ！」

男の手指が、乳房の基部に深々と食い込み、根元から先端に向かって激しく抜き上げた。

「くぁぁぁあんっ！ でッ、出るッ……あぁあぁ、出るう！ ひいいいいいいいッンンッ！」

甲高く裏返った声を上げて仰け反る呪詛喰らい師の爆乳を、壮絶な歓喜の稲妻が貫き、搾り出された体液が世界を白く染め上げて勃起乳頭から迸る。

ぷっしいいひいひいひいッ！　ぷしゅううううううッ！　しゃばああああッ！  
ばしゃばしゃばしゃあッ！

思いつきり振ってから開栓した炭酸飲料のような勢いで、溜め込まれた乳汁が射出され、乳首にあてがわれた掌に飛沫を散らしながら弾けた。

受け止められた巫女の母乳は、乳房の曲面を伝って、胸の谷間へと流れ込む。

スリムに引き締まった腹部に浮き出た腹直筋の縦スジに沿って下降した乳汁は、へその窪みに一旦溜まり、渦巻きながら溢れ出して、太腿と無毛の恥丘が作り出した魅惑の三角地帯に溜まってゆく。

「ンッ……く……んふううう……ンッ！」

温かな乳汁が秘裂に食い込んだ革帯にジワリと染み通ってくる妖しい快感に、仰け反り硬直したままのボンデージ裸身が震える。

股間に満たされた乳汁に小刻みな波紋が拡がり、搾乳快感に喘ぎながら天井を仰いだ美貌に、喜悅と困惑の入り混じった表情が浮かんだ。

「堪らねえエロ顔だな。おい、キスしようぜ！」

「んぐ!? んむううううンッ！」

拒絶する間もなく、デブ男に唇を奪われた。

ポツテリと肉厚な唇が密着し、無精ヒゲがチクチクと突き刺さってくる。

「くふ……んあ……んく……」

搾乳快感に堪らず喘ぎを漏らすと、脂っこい唾液にぬめった分厚く生臭い舌が口腔内にズルリと挿入されてきて、我が物顔で暴れ回った。

「ぐふ！ んふう……んっ……んふ……じゅぷ……くちゅ、くちゅ、くちゅ……」

わずかに抵抗した神伽の巫女であったが、疼きの塊となった爆乳をこね回されながらのデーブキスに屈し、なすがままに口を犯されてしまう。

飢えた野獣のような巨漢の舌は、美少女退魔士の柔らかな舌を吸いしやぶり、突き刺して蹂躪し、千切れんばかりに吸い上げ、口腔を隅々まで舐り回した。

「じゅぱ、じゅぱ、じゅぱ、ずじゅるるる……甘くて美味い唾だなあ。もつと吸わせろよ……ずちゅ……じゅぼじゅぼじゅぷっ……ずじゅるるるッ！」

甘かくぐわしい唾液の味に酔った巨漢は、咲妃の口を思い切り吸い上げ、湧き出す体液を残らずすすり込んでゆく。

（なんて荒々しい舌使いだ……淫神に憑依されていても、信司のキスはもう少し優しくかつたぞ……）

欲望任せに貪り尽くすようなキスで口を陵辱されている咲妃の脳裏に、スケベだがフェ

ミニストな少年の顔と、遠慮がちに蠢く舌の感触が蘇る。

（なっ！ 何故、あいつのことを考えてしまうんだ!? 神伽に集中しろ、私ッ!）

脳裏に浮かんだ淫靡な記憶を慌てて振り払った呪詛喰らい師は、男の攻撃的なキスに翻弄されながら、神の飢えを満たす乳汁を迸らせ続けた。

「おい、さつき、男のこと考えていただろ？ 彼氏か？」

キスを中断した巨漢は、咲妃の唇を舐め回しながら、嫉妬混じりの質問を投げかけてくる。「かつ、彼氏なんて、いないッ！ 男のことなんて考えていないッ！」

反射的に叫んだ咲妃の脳裏に、男子では唯一の親友とも言える少年の顔がちらつく。

「ウソつくんじゃないやねえ！」

乳房に食い込んでいた指が、勃起乳頭をギチッ！ と圧迫して放出を封じる。

「ひあ！ まっ、待て！ 止めるなあ！」

搾乳途中で寸止めされた咲妃の叫びは、悲鳴に近かった。

「隠し事したって、オレにはわかるんだぜ。なんせ、おめえの腹ん中には、オレに憑いてるのと同じ神様が入ってるんだからな。なあ、常磐城咲妃ちゃんよお！」

でっぷりと太った顔に邪悪な笑みを浮かべ、男は有無を言わさぬ口調で尋問を仕掛けてくる。

「お前、どうして私の名を知っている!? ……記憶を読んだのか!？」

「だから言っただろう。咲妃ちゃんの頭の中、少しだけだけど読めるんだよ」

親指と人差し指できつく摘んだ乳首をグリグリと転がし責めながら、依り代の男は邪悪な笑みを浮かべる。

（まさに、腹の中を探られているということか？ 一体どこまで、この男に読まれている？ いや……何を知られ、どんな辱めを受けようとも、神伽だけは成功させねばならない……）  
少女の恥じらいと、神伽の巫女としての使命感が胸中でせめぎ合い、神伽の巫女を困惑させる。

「しっ……信司……という友人なら、居る……」

しばらく葛藤した末、咲妃は震える声で告白した。

「シンジ君か……クククッ、なるほどなるほど……なかなかエロエロなことやってるじゃねえの。シンジって野郎とは、まるでエロゲみてえなハードコアックしたんだなあ」

分体憑依したクナド神を介して、記憶の更に深い部分を盗み見た巨漢は、ねちっこい言葉責めで呪詛喰らい師の羞恥を煽る。

「なっ、何を!? そんなことまで読み取れるのか!? くううう……ッ!」

男のごつい手で乳房を握り締められたままの裸身が、恥辱の記憶に火照り震えた。

「恥じらいと悔しさの混じった表情、すげえそそるぜ! それじゃあ、シンジ君だと思つて、オレにキスしろよ。名前を呼びながら、キスをおねだりするんだ!」

調子に乗った依り代の男は、高飛車な口調で恥辱の行為を要求してくる。

「くううう……しっ、信司……キスしてくれ……」

搾乳寸止めの疼きに耐えきれなくなった呪詛喰らい師は、悔し涙の浮かんだ瞳で男の脂ぎった顔を見上げながら、強ばった口調でキスをせがむ。

「いいぜ、グッチュグチュにキスしてやるよ！」

唾液に濡れ光る、分厚い唇が吸い付いてきた。

「はぶっ！　じゅばじゅばじゅばずちゅうううっ！　　じゅぶじゅぶじゅぶぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅるるるっ！」

「んぐ……くふ……んむふう……くちゅ、くちゅ、くちゅ……くちゅッ……」

男のキスは、先ほどにも増して濃厚で執拗だった。

口腔内の奥深くまで分厚い舌が侵入し、呼吸もままならないほどの激しさで暴れ回る。分泌された唾液は根こそぎ吸い取られ、咲妃の舌は搦め捕られて、舌が食い千切られてしまうのではないかと不安になるほどのハードな甘噛み混じりに責め立てられた。

（……こうしてキスしている間にも、私の記憶は読まれているのか？　ダメだ！　何も考えるな！　心を空にして、これ以上読ませるなッ!!）

己に言い聞かせた呪詛喰らい師は、無心になつて恥辱のキスに没頭してゆく。

「んふ……くちゅ、くちゅ、ちゅば、ちゅば、ちゅば……はふ……あむ……ちゅくちゅく





依り代としての適性が低らしく、ほとんど自我の残っていない革ジャン男は、ゾンビのように突っ立ったまま、咲妃の股間に母乳が満たされるのを待っている。

「んむ……ちゅぱっ……くはう……おっ、おい、そろそろ……飲ませないと……」

「わかってるよお、ラストにもうひと吸い！ ぶちゅ……ずちゅるるるっ……じゅぱっ！  
くちゅ……はああ、咲妃ちゃんの口、最高に美味かったぜ。ミルクもいい感じに溜まってきたな。飲ませてやれ！」

貪り尽くすようなキスから咲妃を解放した男は、餌を食べ終えた犬のように舌なめずりしながら命じてくる。

「さ、さあ……存分に……我が甘露をお飲み下さい……」

股間の三角湖から溢れ出しそうなほど溜め込まれた母乳を、熱く潤んだ目で見つめながら、神伽の巫女はうやうやしい口調で、依り代のカップルを促す。

「うん……お姉さんのミルク、飲んであげる」

「ぐううう……全部……吸ってヤル！」

形良く張り出した腰骨と、肉感的な太腿が作り出した逆三角形の器に、貧乳少女と革ジャン男のカップルが顔を寄せてきた。

ずちゅ……じゅる……ずちゅるるるっ……。

腰骨のラインと腿の付け根が融け合った三角形の窪みに左右から唇が吸い付き、はした

ない音を立てて母乳をすすり飲む。

「ひゃう！ んっ、あんッ！」

微妙な部分を吸いついばまれ、舐められるくすぐったい刺激に、抜群のプロポーションを誇るボンデージ裸身がわなないた。

勢い余った唇が、敏感な内腿や、下腹の柔肌に吸い付くたびに、汗ばみ紅潮した太腿と腹部の筋肉が不随意の痙攣を起こし、閉じ合わせた股関節が緩みそうになる。

「くふ……ンッ……んんんっ！」

甘い呻きを漏らした神伽の巫女は、太腿をきつく閉じ合わせ、股間に形成された媚肉の杯を維持し続けた。

股間に満たされた母乳の量が減っていくに従い、二人の舌と唇は秘部へと近づいてゆく。ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ぴちゃぴちゃぴちゃ、ちゅぱっ、ちゅぱっ……。

少女と男の唇が、下腹から無毛の恥丘へと続く敏感な肌を交互に吸いついばみ、閉じ合わせた腿の奥で震えているクリトリス周辺へと迫って来る。

（くう……ダメだ……そんなに吸われたら……もつと奥に……欲しくなってしまう！）

今すぐにも股を開き、秘裂に食い込んだ革帯をずらしておねだりすれば、疼き火照った性器を貪るように吸いしゃぶって絶頂させてもらえるのではないか？ そんな淫らな衝動が湧き起こって、神伽の巫女を煩悶させる。

「あふ……ンッ……あ……はあんッ！」

疼き昂る性器の奥で膣道が妖しくうねり、子宮が甘美な震えを起こすと、背骨が蕩けてしまいそうな悦波が湧き起こってきて、艶めかしい喘ぎが漏れてしまうのを抑えきれない。「咲妃ちゃんよお、ますますエロい顔になってるぜ、おつと、追加のミルクが必要だな。強く搾ってやるよ！」

搾乳担当の巨漢は、喉元から鎖骨のラインをヌロヌロと舐め回しながら、乳房に食い込ませた指に力を込める。

「ぎちいいいっ！　ぎゅむうううっ！」

太い指が爆乳の基部に深々とめり込み、母乳工場と化した柔肉の塊を握りつぶさんばかりに圧搾する。

「きやふううう！　あああああ！　出る……イッ、ヒッ、あはあああ〜ンッ！」

ぷししゅううううう〜ッ！　ぱしゃあああ！　しゃぱしゃぱぶしゆるるるる〜ッ！！

可愛らしい悲鳴を上げた咲妃の乳先で、勃起乳首と乳輪がプクンッ！　と尖り勃ち、新たな乳汁シャワーが掌に弾けた。

（あ……あああ、凄くいっぱい出てる。搾られるたびに胸の芯を快感が走り抜けて……下も……溢れて……母乳に混じってしまうッ！）

歡喜の汗に濡れ光る呪詛喰らい師の顔に、悩ましげな表情が浮かぶ。

搾乳の快感と、太腿や下腹を吸い舐められるもどかしい愉悅が秘裂にも伝わり、秘裂の潤みが限界まで来ているのだ。

くちゅ……じゅわっ……トロッ……ちゅるるるっ……。

小刻みな収縮が止められない膣口から熱い愛液が溢れ出し、秘部を守る革帯の隙間から滲み出て、股間に溜まった母乳に混じってゆく。

「ぴちゅ、ちゅぱっ……ちゅるるるっ……。んはあ……お姉さんのミルク、さつきよりもエッチな味と匂いがある」

顔を上げた貧乳少女が、舌なめずりしながら告げる。

「なっ、何を……!?!」

「へえ、もしかしてマン汁が混じったか？ それとも、小便漏らしちまったのかな？」

少女の指摘に顔を引きつらせる咲妃の耳元で、巨漢が卑猥な質問を投げかけてくる。

「この匂い、オシッコじゃないよね？ お姉さんのラブジュース……凄いエロい匂いと味……ねえ、もつと飲ませて……んふ……ちゅる……ぴちゅぴちゅぴちゅ……」

緊張して強ばった呪詛喰らい師の太腿に頬ずりしながら言った貧乳少女は、残り少なくなった母乳溜まりに顔を埋め、鼻先で秘部を擦りながら、乳汁を舐め取ってゆく。

「くあ！ アッ……あひ……ンッ、んっ、ひゃう！ んはああん……ッ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**